

記憶の物語

櫻田 智也
さくらだ ともや

2021年、コロナ禍のなか、祖母が長万部を離れることになった。94歳の一人暮らしは、さすがに難しいとの判断だった。

らだったろう。進学と就職で道外に居着いてしまったから……という理由はもっともらしいが、それだけではなかったと思う。

ぼくは1977年に長万部で生まれ、小学4年生まで住吉町の国鉄官舎に住んでいた。子どもの足でも遠くない高砂町の祖父母宅は、もうひとつの自宅のようなものだった。函館に引っ越したあとも、祖父母がいる長万部は、いつでも帰ることを許される故郷でありつづけた。そんなもうひとつの実家が、とうとう空き家になってしまった。子どもの頃によく遊んだ従妹にメールをすると、「長万部の家は安らぎの空間だった」と返信があった。

自立したくて、つい背伸びをする青年期には、自分を気にかけてくれる身近な存在——とくに親類——を煩わしく感じるときがある。「俺だって大人なんだから」という反発と、「大人なのに心配ばかりかけている」という後ろめたさの両方が、親や祖父母との距離を遠ざけた。長万部にほとんど帰らぬ20代をすごし、30歳のときに祖父が亡くなった。

それから14年、祖母が長万部を離れたことで、ぼくと故郷の繋がりは消えてしまったと感じていた。ところが翌2022年、長万部町の地域おこし協力隊から思わぬオファーをもらった。地元出

それが華は殺人事件と決まっている。町内にそのような悲劇を起こすことが、はたして故郷への恩返しになるのかどうか……。

ふたたび長万部と疎遠にならぬよう、慎重に検討する必要があるそう。

が長万部との繋がりを取り戻してくれたと考えれば、それはそれで、ちよつとした物語のようだ。

そういえば講演の質問コーナーで、「次は（架空の街ではない）長万部を舞台にしてほしい」という意見を頂戴した。ぜひとも実現したい魅力的なアイデアだが、問題は、ぼくの専門が推理小説であるという点だ。なしる推理小



身の小説家として講演をしてほしいという内容だった。そんな依頼は初めてだったが、断るという選択はなかった。なぜならぼくは小説家として、すでに長万部のお世話になっていたからだ。

2020年に出した2冊目の短編集に、北海道を舞台にした「ホタル計画」という話が入っている。主人公である探偵の過去を巡る物語なのだが、描きたかったのは、大切な人と向き合えなかった後悔や、大切な人を亡くした喪失感、そしてなにより、傷ついた登場人物たちがそれぞれの再生へと向かってゆく姿だった。

自分の後悔と向き合うように書いたその短編のなかで、事件が起こる架空の街は、当然のように長万部を想わせる場所になった。その街には鉄路がはしり、東京の大学のキャンパスがあり、そして事件に関わる少年は祖父母の家で暮らしている……。

おそらく「ホタル計画」を書いていなければ、長万部から講演のオファーは届かなかっただろうし、こうして記念誌に寄稿することもない。長万部の記憶が小説になり、その小説



▲櫻田智也先生の著書
出版社 東京創元社
装画 河合真維
装幀 長崎綾(next door design)

小説家 櫻田 智也

1977年長万部町生まれ。2013年、「友はエスパー」が第4回創元SF短編賞の最終候補となる。同年、「サーチライトと誘蛾灯」で第10回ミステリーズ!新人賞を受賞。2018年「火事と標本」、2020年「コマチグモ」にて第71回・第73回日本推理作家協会賞短編部門候補となる。2021年、『蝉かえる』で第74回日本推理作家協会賞長編及び連作短編集部門、第21回本格ミステリ大賞小説部門を受賞。

